

「交信かく乱剤」を活用した ねぎのシロイチモジヨトウ 対策について

近年、温暖化の影響で、ねぎの害虫であるシロイチモジヨトウの発生時期が早まり、長期化する傾向が見られます。「発生時期が考えていたよりも早く、防除が間に合わず被害が甚大になってしまった」、「何回も防除しても、シロイチモジヨトウの増加スピードに追いつかなかった」というような御苦勞をされた方も多いと思われます。

昨年、農薬メーカーの協友アグリ株式会社と大里農林振興センターが、深谷市内のねぎのほ場で「交信かく乱剤」である「ヨトウコン®-I-S」を設置する試験を行ったところ、シロイチモジヨトウの発生が抑えられる様子が見られました。また、今年度も引き続き試験を行っておりますので、講習会等で情報を提供していきたいと思っております。

1 交信かく乱剤とは

昆虫等でメスがオスを誘引するために放出する化学物質を「性フェロモン」と呼びます。「性フェロモン」には、微量で誘引するという特徴があります。メスのわず

かな匂いをたどって、オスが移動していきます。

そこで、人工的に合成した性フェロモン剤を畑に充満させると、性フェロモンによって惑わされたオスは、どれが本物のメスの匂いか分からず、でたらめに飛び回り、メスにたどり着けなくなります。その結果、交尾ができず、次世代の害虫の発生を防ぐことができます。

このような現象を「交信かく乱」といい、交信かく乱を目的とした「交信かく乱剤」がいくつか商品化されています。

交信かく乱剤は、農薬取締法に基づき「農薬」として登録を受けており、有機JASでも使用が認められています。

2 交信かく乱剤の特徴

交信かく乱剤の効果は、数か月続くので、シロイチモジヨトウの発生前から設置しておくことにより、ほ場での発生密度を減少させ、殺虫剤の散布回数もしくは食害を未設置のほ場よりも減らせます。

また、殺虫剤のように散布して農作物に付着させるものではないので、散布ムラや、ドリフトを心配する必要はありません。さらに、殺虫剤と比較して、一般的に害虫に抵抗性がつきにくいとされています。

3 注意点

- ① シロイチモジヨトウがほ場に入ってくる前に設置。
- ② 設置面積は、広ければ広いほど効果は安定。
- ③ 支柱等に巻き付けて、作物の生育に支障がないようにしてほ場全体に設置。使用量の範囲で特に周辺部を多めに。
- ④ シロイチモジヨトウが増えてきた場合は、殺虫剤と併用。
- ⑤ 交信かく乱剤は、2〜3か月すると効果が低下してくるので、それ以降も継続して設置する場合は、新しいものに付け替える。



写真

右上 … ヨトウコン®-I-S
右下、左… ねぎほ場の設置の様子

カメムシ類対策の お知らせ

近年、カメムシ類による水稻の被害が増大しています。カメムシ類は稲穂を吸汁することにより、米の収穫量や品質に悪影響を及ぼします。

稲穂が出る時期に河川等の草刈りを行うと、そこで越冬していたカメムシ類を水田に呼び込むこととなります。そのため埼玉県では、稲穂を守るため、稲穂が出る期間の草刈りを避ける取り組みを昨年度に引き続き実施しています。

この取り組みにより、夏場の雑草が繁茂する可能性があります。ご理解とご協力をお願いいたします。



埼玉県マスコット「コバトン」

7月	8月	9月